地震津波災害に備えて

—三陸・奥尻津波から学ぶ—

Be Prepared for Tsunami Desasters
—Learning from Experiences of
San-riku and Okushiri—

三陸地域の地震津波に関しては，記録に残されている中での最大規模のものとして，明治29年（1896年）6月15日の三陸地震津波である．この大津波により，北海道から宮城県の太平洋岸にかけ，約27 000人が流死し史上第一級の巨大津波と記録されている．また，この大津波からわずか37年後の，昭和8年3月3日の三陸地震津波では，岩手県沿岸を中心に死亡・行方不明者は3 008人に及び，その後も，昭和35年のチリ地震津波等，三陸沿岸は，津波の常襲地帯と言われている．一度発生すると，多くの犠牲者を含む悲惨な地震津波災害も，時間経過とともに人々の関心がうすれ，防災意識の低下といったことが指摘されることとなる．

北海道南西沖地震による奥尻島の被災状況が大々的に報道されて，多くの人が衝撃を受けたのはまだ記憶に新しいところであるが，こうした，大規模地震災害の記録や過去の経験に基づいた有意義な教訓を，正しく理解することによって次の災害に備え，また，後世に正しく伝えられることが大事であると考えられる．

現在，運輸省直轄事業により，恒久的な津波対策施設として，釜石港湾口防波堤の整備を実施している，第二港湾建設局釜石港工事事務所にあっては，国の財政難による予算確保が困難な情勢の中，津波に対する関心と，地域ぐるみの整備促進の機運を高め防災施設としての津波防波堤の必要性を理解してもらいたいとの思いで，地元，釜石市での津波講演会を開催することとした．主催は，運輸省第二港湾建設局釜石港工事事務所，岩手県土木部港湾課，釜石市の三者があたり，共催は，釜石湾内，三漁業協同組合（釜石，平田，白浜浦），後援者として，報道機関の岩手日報社，岩手東海新聞社，三陸河北新報社，釜石ケーブルテレビにより，昨年7月5日，陸中海岸グランドホテルにおいて，地元一般市民約300人を対象に企画したが，会場に立席が出るほどの熱気となった．

講演は，釜石市の郷土史家，昆　勇郎氏の「明治29年の大津波災害」に始まり，豊富なデータ，文献からなるテキストにより，郷土史を説きおこしながら詳しくお話しいただき，また，貴重な津波関連資料をパネルで展示し，来場者の関心を集めた．

続いて「津波被害と津波防災」のテーマでは，東北大学・首藤伸夫教授の講演予定であったが，急遽，ジャワ津波の現地調査から帰国したばかりの，秋田大学・松冨英夫助手にお願いし，各地の広範囲な現地調査結果を踏まえ，数多くのスライド，OHPを使用して，わかりやすく考察を加えてお話しいただいた．

20分の休憩の間，会場ロビーの展示パネル写真への関心も高かった．

引続き，NHKビデオ「急襲　津波災害に備え

写真-1　昆　勇郎氏

写真-2　松冨英夫氏（壇上）

写真-3　鴈原　徹氏

写真-4　高山知司氏

る―北海道南西沖地震の教訓―」の放映を行い，3人目の講師としてお招きした，奥尻町総務課長・鴈原徹氏の「奥尻津波の体験談」の講演に移った．鴈原氏の物静かな口調で「あの忌まわしい災害から，早1年が来ようとしています」と話しだされると，会場内は一瞬静まりかえり「(7月12日の夜の惨状は) 忘れようとしても，今でも鮮明によみがえってくる．二度と奥尻のような悲しい体験をさせたくない」と今も災害の傷跡が残る生々しい体験談，復興に向け努力している現状等，実際に体験した当事者が語る言葉に，場内では身を乗り出して聴き入る姿も見られ，深く感銘を与えた．

この津波災害で，不幸にして犠牲者となった人たちの要因について，鴈原氏は，車社会の盲点を指摘されている．車を使って避難しようとした人，また，お金や貴重品をとりに戻った人が犠牲となっている，と分析されている．「走って高台に避難する」改めて教訓とすべき点であろう．一度も笑顔をのぞかせることのなかった鴈原氏であったが，最後に，奥尻町出身の詩人，麻生直子さんが送ってくださったという，以下の詩に「痛く胸に感ずるものがある」といって朗読されたのが，大変印象的であった．ここにその詩をご紹介させていただくこととする．

写真-5　聴講中の一般市民

憶えていてください

麻　生　直　子

憶えていてください
青い潮風の海辺の町で
すこやかな心とからだをもった人びとが
ていねいに生きていた一日一日を

一瞬の大地の鳴動が
破壊しつくしたあの夜の津波の怖さ
連れさられた家族たち
悲しいその光景に失意して
未来を拒んだりしないでください

あなたの一日一日を
このままでは終わらせないでください
はるかな海の
月夜の眠りに還っていった人びとのために

最初の人が板切れとともにこの磯に立ち
銀色の魚を釣り
野菜や穀物を育て
ひと組の男女が結ばれ

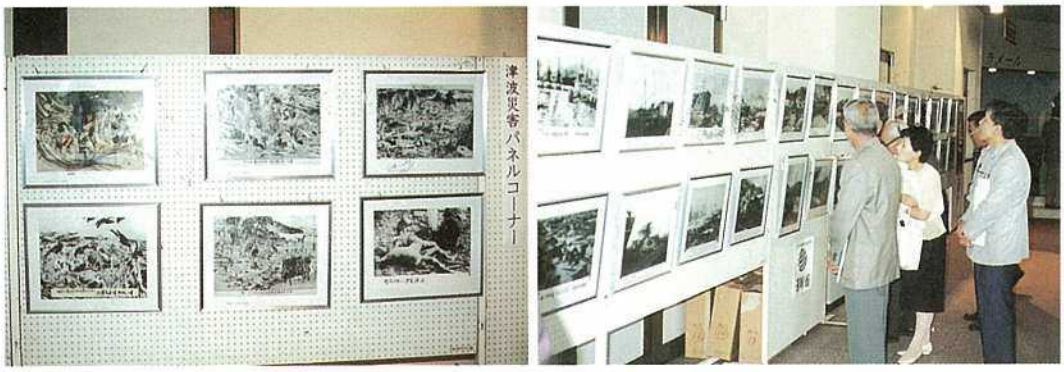

写真-6　津波災害関連パネル展示コーナー

父となり母となり
ながい寒さから幼な子をまもり
働くことをいとわずに築いてきた村や町
くらしの糧をわけあってきた
海辺の家族の
その歳月を置き捨てずにいてください

生き残った人びとの
心に移り住んでいく魂たちの祈り
無数の人びとの温かな声援
憶えていてくださいあなたも

本講演最後の講師として，運輸省港湾技術研究所・高山知司水工部長より「津波の発生とその変形」と題し，専門的な立場から津波の発生原因と発生した津波が，沿岸の海底地形の影響で増幅される機構について講演いただいた．現状の技術においても，地震による海底地形の変化や，津波の変形については，ある程度数値計算によって推定は可能と述べられている．また，津波は，今後発生域が空白な地点から起きる可能性を指摘され，過去に津波が発生した地点においても100年程度の年数が経過した地点においては，発生する可能性が高く，『災害は忘れた頃にやって来る』という格言は，災害の周期性を，これまでの経験から述べたものだけではなく，法則性があることを示したものであり，我々はこれを肝に命じて，今後の津波防災対策を考えておく必要がある，と強調された．

改めて地震津波の怖さを認識し，防災意識の高揚に寄与する有意義な講演会であったことを，ここにご紹介させていただくこととした．

地震は，全世界の約一割が日本列島で発生していると言われる．「地震即避難」は鉄則であるが，昨年12月28日に突然襲った「三陸はるか沖地震」では，帰省客を含め年の瀬の暮らしを痛撃した災害となり，また，今年1月17日の「阪神・淡路大震災」では，人口密集地域での地震災害のため，大都市機能を完全に麻痺させ未曾有の大惨事となっている．日本列島いつどこで起きるか予測困難な地震災害に対し人的被害をいかに最小限に食い止めるか，個々の防災意識はもとよりのこと，組織的な備え固め，万全な体制の整備が最大の課題であると痛感される．

（運輸省第二港湾建設局釜石港工事事務所次長　菊地　博）